

高橋 隆雄（倫理学）

生命・環境・ケア ― 日本生命倫理の可能性 ―

本論文は、日本思想・文化の中に見出されるケア概念を中核として、日本生命倫理の可能性を追求し、生命倫理と環境倫理の統合を目指す意欲的な試みである。

本論文は二部構成となっている。第Ⅰ部は三章からなり、従来のケア概念に代わる新しいケア概念を記紀神話のうちに見出し、そのケア概念を日本生命倫理における基礎概念として打ち立てる。第Ⅱ部も三章からなり、生命倫理、環境倫理の諸問題を再検討し、新しいケア概念のうちその統合の可能性を見る。

本論文の特色は以下の点にある。

第一に、日本文化をケア的文化と規定し、その源泉を『記紀』にまで遡って探求し、そこに日本的なケア概念を見出している。神々が要求する祀りは、「忘れないでいる」、「気にかける」、「世話をする」と解釈できるから、一種の「ケア」と見なしうる。欧米由来であり現在の日本でも主流であるケア概念と対比して、こうした日本的ケア概念の特徴として、死者や神、動植物、自然までもケアの対象としうる点、ケアの脈絡と互酬的側面を重視する点、ケアがいわゆる感情労働であることを強調する点が挙げられる。これは様々な議論を生み出す魅力的な論点である。

第二に、ケアの対象は人間に限定されず、動物や自然、また死者や神々を含む、つまり傷つきやすい「いのち」であることから、環境倫理がテーマとする自然との関係を、こうした「いのち」との関係として理解できる。ここにケア概念を中核として、生命倫理と環境倫理を統合する可能性が拓かれる。

第三に、ケア概念の補完として権利（過大なケアへの対抗として自由権、過少のケアへの対抗として社会権）を導いている。これはケア概念を権利や正義の原理の補完としてではなく、その逆を考える可能性を示している。

第四に、劣化、ミス、死に晒される自己と他者（傷つきやすい生命・いのち）をケアするという観点に立って、人間が人間である特殊性（自由や自己実現、幸福追求、道徳的自律）に基づく尊厳概念でなく、生命の特徴に基づく尊厳概念を提示している。

第五に、まつることをケアと解釈することは、日本思想・文化に新しい光を当てることになる。神と赤子との類似、夢幻能での死者の霊への対応、日本の神々の傷つきやすさ、神仏習合（ケアを求める神がケアすることを本性とする仏に救いを求めた）など。

本論文の独自性は、基本原理となりうるものを日本思想・文化の源流に見出すことによって、日本的な生命倫理を構想したことにある。それによって従来の日本生命倫理とは異なり、各論ではなく日本の生命倫理全体に関わる議論を展開できるようになった。そして欧米特にアメリカの理論に頼ってきた日本の生命倫理を理論的に自律させること、原理レベルで対立するとみなされている生命倫理と環境倫理を統合する一步となること、こうした狙いを本論文は見事に果たしている。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。